

香川県三豊市（国内8例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る  
疫学調査チームの現地調査概要

令和6年2月6日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵育成鶏（約7万羽）

発生家きん舎の構造：1階建てセミウインドウレス鶏舎

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（直立4段ケージ4列、通路5本）

2 施設の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、山間部に位置しており、竹林及び雑木林に囲まれ、一方が斜面に面していた。周辺には田畑が存在した。
- ② 調査時、農場から南西に約760mに位置するため池でマガモ19羽、コガモ18羽等、合計56羽のカモ類が確認されたほか、農場から南東に約1.2kmに位置するため池でホシハジロ17羽、ハシビロガモ14羽等、合計58羽のカモ類が確認された。
- ③ 当該農場には、セミウインドウレスの採卵鶏育成舎（ケージ飼い）が2棟、開放型の採卵鶏育雛舎（平飼い）が3棟あり、発生時、育雛舎2棟は空舎であった。発生鶏舎は育成舎のうちの1棟であり、農場の中央に位置していた。
- ④ 当該農場から約100mの距離に、疫学関連農場（系列の採卵鶏育雛農場）が位置していた。

3 通報までの経緯

- ① 農場長によると、発生鶏舎（通報時66日齢）では、通常ほとんど死亡は見られないが、1月30日に発生鶏舎の同一ケージ内で8羽中3羽の死亡を確認したとのこと。翌日には発生鶏舎の約3万羽中146羽の死亡が確認されたが、鶏の症状から当初はブドウ球菌症を疑い、2月1日から抗菌剤を3日間投与して様子を見たが、その後も死亡の増加が続き、2月4日には約1,000羽の死亡を確認したため、2月5日に家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 農場長によると、最初に複数の死亡鶏が確認されたのは、発生鶏舎の入口から3分の2ほど進んだ中央列の上段部分の1ケージであったが、このほかに4羽の死亡鶏が鶏舎内に点在して確認されたとのこと。
- ③ 調査時、多数の死亡鶏が発生鶏舎全体で確認された。発生鶏舎に隣接する鶏舎2棟のうち、育雛鶏舎（平飼い）については殺処分が終了していたが、育成鶏舎（ケージ飼い）については、発生鶏舎側の列で複数の死亡鶏が確認された。

4 管理人及び従業員

- ① 農場長によると、当該農場には従業員6名が勤務しており、全体管理1名（農場長）、育成担当2名、育雛担当2名、鶏糞作業担当1名で飼養管理を分担していたとのこと。
- ② 育雛担当の従業員1名は、疫学関連農場の飼養管理も行ってたとのこと。なお、発生農場と疫学関連農場に立ち入る順番は特に設けておらず、農場間を移動する際は、更衣、長靴交換及び手指消毒は行ってないとのこと。

5 施設の飼養衛生管理

- ① 農場入口には門扉等はなかったが、関係者以外立入禁止の看板が設置されており、車両が入場する際は、入口に設置された動力噴霧器を使用し、来場者自身で車両消毒（逆性石けん）を行っていたとのこと。
- ② 従業員は車で通勤しており、農場入口で車両消毒後、衛生管理区域内に駐車し、入口付近の倉庫内で長靴交換を行い、近くにある別棟の小屋で更衣及び手指消毒を行って

いるとのこと。一方、外部業者等が立ち入る際は、専用作業着への更衣、専用長靴への交換、手指消毒は行っていなかったとのこと。

- ③ 従業員が鶏舎に立ち入る際は、各鶏舎前で踏込消毒（複合製剤、週1回程度交換）を行い、鶏舎入口において鶏舎専用長靴に履き替え、手指消毒を行ってから作業に従事していたとのこと。すのこ等は設置されておらず、長靴交換前後の動線は区別されていなかった。
- ④ 鶏舎の周囲には、消石灰を週1回程度散布していたとのこと。
- ⑤ 発生鶏舎の入口妻側に温度で自動制御される排気ファンが7台設置されており、冬季は1～3台を稼働していることが多いとのこと。入気は、鶏舎平側の奥側一部に設置されたクーリングパッドから行われ、冬季は上部以外はシートで覆っているとのこと。
- ⑥ 発生鶏舎を含め、ケージ内の飼養羽数は1ケージ当たり8羽であり、死亡鶏が出て羽数が欠けた場合は、常に1ケージ当たり8羽となるよう、同一鶏舎の他ケージから同一ロットの鶏を補充していたとのこと。
- ⑦ 鶏の導入・出荷は、系列会社の移動専門部門が担当しており、移動に使用するトラック等についても、当該部門が所有しているものを使用するとのこと。また、当該農場内での雛の移動についても当該部門が担当しており、農場長は当該部門が農場に立ち入る際の更衣や長靴交換の実施は把握できていないとのことだったが、系列会社によると、ヤッケと長靴を持参し、トラック降車時に更衣していたとのこと。
- ⑧ 発生鶏舎を含め、育成鶏舎では複数の異なるロットの雛が飼養されており、鶏舎内に部分的に雛が入っている状態で、導入や出荷が行われているとのこと。発生鶏舎への直近の導入は令和5年12月28日及び令和6年1月5日、出荷は令和5年10月31日とのこと。なお、最終的にはオールアウトを行い、約60日間の空舎期間を設けているとのこと。
- ⑨ 飼料タンク上部には蓋がされており、飼料はラインを通じて自動給餌されるとのこと。また、給与水には水道水を使用し、ラインを通じて自動給水を行っているとのこと。
- ⑩ 当該農場では、自農場の堆肥舎で鶏糞処理を行っておらず、発生農場から約6km離れた系列農場に隣接する鶏糞置場に、週2～3回程度、鶏糞を搬出しているとのこと。事情により自農場の鶏糞を外部に搬出できない場合は、自農場の堆肥舎で一時保管していたとのこと。なお、普段は、自農場の堆肥舎では、別の系列農場から一次発酵後の堆肥を受け入れていたとのこと。直近の鶏糞の搬出は1月27日、一次発酵堆肥の搬入は1月末頃とのこと。
- ⑪ 死亡鶏は、毎日午前中の見回りの際に回収し、プラスチック製の袋に入れて鶏舎内で一時保管した後、発生農場から約4km離れた系列農場に隣接する処理施設に搬出し、発酵堆肥化処理していたとのこと。直近の搬出は1月31日とのこと。
- ⑫ 農場長によると、系列の農場間で、鶏糞搬出用のダンプを共有することがあるが、返却時は車両消毒を行っていたとのこと。

## 6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場長によると、当該農場では時折カラスを見かけることがあるとのこと。調査時、堆肥舎に侵入したカラス類を2羽確認したが、堆肥舎には防鳥ネットが設置されており、普段は入口の防鳥カーテンは閉め切られているため、カラス等の野鳥は侵入しないとのこと。
- ② 農場長によると、農場敷地内では、まれにネコを見かけることがあるとのこと。以前、鶏舎内にイタチが侵入したことがあったが、壁面を金網等で対策して以降、小動物が鶏舎内に侵入することはなくなったとのこと。また、殺鼠剤を使用しており、鶏舎内でネズミを見かけることはないとのこと。
- ③ 調査時、農場の辺縁付近でイノシシによる掘り返しの跡が確認された。鶏舎が古く、窓枠の隙間や、網の設置されていない排水口等の小動物の侵入可能な隙間があったが、鶏舎内ではネズミを含む小動物の侵入の痕跡等は確認されなかった。

(以上)